様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３３９２０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１１８７２

研究課題名（和文）野宿生活者が「野宿」から「社会」に戻ることを目指した看護支援

研究課題名（英文）Nursing Support with the Aim of Helping Homeless People Return from 'Sleeping on the Streets' to 'Society'

研究代表者
白井　裕子（SHIRAI, HIROKO）

愛知医科大学・看護学部・講師

研究者番号：４０３５１１５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：野宿生活者がアパート生活に移行したきっかけには、病気や怪我やなどによって野宿生活を継続できないという気持ちに変わるそれぞれのタイミングがあった。また野宿生活から抜け出す方法がわからず支援を待っていたり、日常生活の中で起こった偶発的な出来事が転機となったという事例もあった。支援のあり方として、出会うすべての人に将来に対する気持ちを積極的に問いかけ続け、気持ちに変化が起きるタイミングまで健康を支援することが必要である。また野宿生活者が出会う出来事が次の生活に向かう転機となり得るよう、その出来事を意味づけしていく関わりも必要である。そのために野宿生活者の語りを聴くことが重要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
野宿生活者の高齢化や長期化が指摘され、依然として9,000人もの人々が野宿生活を送らざるを得ない中で、野宿生活からアパート生活に移行できた要因を明らかにすることは今後の支援の方法や施策のあり方に示唆を与える。また、これまでの野宿生活者がアパート生活に至る過程に関する研究では、当事者である野宿生活者の立場からその過程を明らかにしているものは見当たらない。今回の研究は、野宿生活経験者の語りから、野宿生活をしていた時の気持ちやその変化を分析し、アパート生活に移行した要因を明らかにしているものであり、意義がある。

研究成果の概要（英文）：It was discovered that homeless people returned to life in an apartment for various reasons, including sickness or injury, which made them think that they would not have to sleep on the streets any longer. There were also some cases in which they did not know how to escape life on the streets and waited for someone to help, or a coincidental event in their daily living transformed their lives. As an ideal way of support, it is necessary to ask all homeless people about their thoughts of the future proactively and support their health until they change their minds. It is also necessary to get involved in giving meaning to an event so that it may give the homeless an opportunity to move on to a new way of life. To fulfill this objective, I thought that it was important to hear their stories.

研究分野：地域看護学、在宅看護学

キーワード：野宿生活者　野宿生活経験者　社会復帰　健康支援　看護

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

バブル経済崩壊後続く経済停滞による企業の倒産や労働市場の縮小の中で、仕事や住居を失い野宿生活を強いられる人々（以下「野宿生活者」）は、1990年代から急増した。2002 年公布・施行された「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」に基づき、各自治体では野宿生活者の健康や自立支援のための諸政策が講じられ、2003 年に全国で25,296 人と報告された野宿生活者数は、2012年には9,576人に減少した。とはいえ、今もなお9,000 人もの人々が野宿生活を送らざるを得ない状況にある（2003、2012 年厚生労働省）。

2012 年の厚生労働省の報告によると、最近の野宿生活者の特徴は、高齢化（平均年齢59.3 歳で、65 歳以上は全体の29.0%）や野宿の長期化（47.0%が5 年以上野宿生活をしている）であると指摘されている。さらに、将来について「今のまま（野宿生活）でいい」と考えている人は、全体の30.5%であり（平成15 年との比較では約2 倍に増加）、年齢層が高いほど、そして野宿生活が長期化するほど「今のままでいい」という回答が多かったと報告されている。

研究者らは、野宿生活者の健康支援活動を継続的に行っているが、その中で出会った人の中には、将来について「どうなってもいい」「野たれ死ねばいい」と言う人もいる。しかしある人は、「野宿生活というものは、路上に横たわるうちにだんだん服が汚れていって、そのうち身なりを気にしないようになっていく。そして、社会に戻ろうという気持ちが萎えてくるんだよ」と言っていた。つまり、野宿生活が長期化するうちに、本人の意識されないところで「だんだん」に社会に戻る気持ちが萎縮し、そして高齢になるにつれ新しい生活に向けて行動を起こすエネルギーさえも消失していき、結果として「このままでいい」という気持ちになるのではないかと考えられる。そうであるとすれば，こうした状況に陥った人々に対して、野宿生活の中で少しでも気持ちが萎縮しないよう、将来の生活に向けた気持ちを持ち続けることを支え、その人それぞれのニーズに合わせた社会資源の情報提供や、それぞれのタイミングにあわせてその人を後押しする支援が必要である。一方で、すでに将来の希望を失った人々に対しても、心を解きほぐし新たな希望を見出せるような関わりが必要である。そこで、将来の生活への希望を失ったり、自身の将来像を描くことができない野宿生活者が，新たな希望を見出し，野宿生活からアパート生活に移行するための看護支援のあり方を明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

１）野宿生活経験者またはそれを支援する支援者へのインタビューを通して、野宿生活を強いられている人々がどのようなきっかけや経緯でアパート生活に移行したのか、野宿生活の中でどのような気持ちや考えをもっていたのかについて明らかにする。

２）１）の結果から、野宿生活者に変化をもたらす支援方法について検討し、研究者らがこれまで継続してきた健康支援活動で実際に行い、野宿生活者の様子や変化から、野宿生活からアパート生活に移行するための効果的な支援のあり方について明らかする。

３．研究の方法

１）半構造的質問調査の実施

（１）同意の得られた野宿生活者経験者9名に対して、アパート生活になった経緯、将来をどのように考えて野宿生活をしていたかなどについて、半構造的質問調査を行った。依頼の方法は、研究者らが行っている研究支援活動を通して出会った野宿生活者に直接依頼、または日頃から研究者らと協働して活動を行っている他の団体の支援者から紹介を受けた。

（２）野宿生活者のアパート移行の支援を行っている支援者3名に対して、これまで行った支援の中でうまくいったと思う事例や困難だったと思う事例とその理由などについて、半構造的質問

調査を行った。研究者らが日頃から協働して活動を行っている支援者に直接依頼した。
（３）半構造的質問調査から得られた内容から、野宿生活をしていた時の気持ちや意志の持ち方、自ら起こした行動の有無、相談相手の有無、どんな支援を受けたのかなど、野宿生活からアパート生活に移行するきっかけとなった要因を分析し、必要な支援方法の検討を行った。
２）炊き出しの場での健康支援活動の継続と参加観察
（１）半構造的質問調査から検討した支援方法を、研究者らがこれまで継続的に行ってきた健康支援活動において実施した。
（２）健康支援活動の全体の様子や実際の野宿生活者との関わりについて、記録した。特に、野宿生活者との関わりについて、会話の流れや表情などは詳細に記録した。
（３）支援を行った結果、野宿生活者にどのような変化があったのかを評価し、野宿生活からアパートに移行するための効果的な看護支援のあり方ついて検討した。
３）本研究は愛知医科大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号87）。

４．研究成果
１）野宿生活者がアパート生活に移行するきっかけ
(1)A氏：60代男性。母親の介護を終え「もうやることがなくなったな」という気持ちで飯場生活を始めた。飯場での生活が合わずに40代半ばから野宿生活を始めた。橋の下に定住するようになり，行政職員の定期巡回で「ここから早く出たほうがいい」と言われたが，ダメになるまで頑張ると言い続けた。野宿生活では身体が動かなくなることが一番怖いと考え，自分で動けるうちは何でもできると思っていた。またいつ死んでもいいという感覚で過ごした。ある日転倒して骨折し，入院したことをきっかけに，生活保護受給をすすめられた。生活保護受給者は楽をして生活している人であると思っており，自分が受給することで同じようにみられるのではないか，また保護費は税金であることから，税金を適切に使えるだろうかと悩んだ。2～3日考えた結果，受給することを決めアパート生活に移行した。人間らしい暮らしを取り戻せた気がしたと語った。
(2)B氏：30代フィリピン人女性。あてのないまま自宅を出て，1週間の野宿生活を送った。空腹や孤独と闘いながら駅構内で寝泊まりしながら，今後のことについて考えた。結婚している友人には迷惑はかけられないと思っていったが，唯一離婚した友人を思い出し，助けてもらおうと思って重い荷物をもって歩き出した。その通り道に，偶然にベニヤとブルーシートで作られた小屋を見つけ，ホームレスの人の小屋であるとすぐにわかったが歩き疲れていたこともあり，そこに入り込んで一夜を過ごした。故郷では，幼い頃にホームレスの友達のところに遊びにいった経験もあり，その小屋で一夜を過ごすことには抵抗はなかった。翌日，偶然にも支援者と出会い，生活保護受給をすることができた。B氏は,「神様は助けてくれる」と思いながら1週間を過ごした。
(3)C氏：60代男性。幼少期は児童養護施設，17歳頃から日雇い労働や社員寮付の仕事を転々とした。簡易宿泊所やサウナなどに宿泊しながら，2～30年野宿生活を送った。この間に，精神科病棟や外科系病棟に入院するが,「こんなところにいたら殺される」と思って自己退院した。また，いったん生活保護受給もしたが，仕事がないにもかかわらずワーカーに就職をするよう言われ，嫌になって2階から飛び降り骨折をして入院したこともあった。野宿生活をする中で，自分が救急搬送された経験や，周囲の野宿生活者の死を知る中で「長生きしたい」「部屋が欲しい」と思うようになったが，自分から支援者に「アパートに入れて」とは言えず，声をかけられるのを待ち続けた。今のアパート生活は3年続けている。顔見知りの支援者が自分の過去を受け止めて，アパート生活をすすめてくれたことがありがたかったと語った。
(4)D氏：70代男性。出所後，定職についたが会社側の問題で職を失い，その後日雇い生活者とな

った。自分のアパートも持っていたが，日雇い労働者の集合場所が野宿生活者が生活している公園であったことから，だんだんにアパートから足が遠のき，公園の一角に自分で小屋を建てて生活するようになった。3年ぶりにアパートに戻ってみたところ，鍵が変わっており入ることができず，野宿生活となった。「平々凡々と」「もうどうなってもいいや」という気持ちで10年間を過ごした。野宿生活になってしまうと，困っても他者に相談することもできなかった。しかしだんだんと「これはまずい」と思い始め友人に相談したところ，支援者を紹介されアパート生活に移行した。もっと早くにアパート生活に戻る方法がわかっていたらよかったと語った。

(5)E氏：80代男性。家業の手伝いと日雇い労働で生計を立てていたが，両親の老いや実弟が家業を継ぐようになってからは，徐々に生活の中心は日雇い労働となり，60歳頃からは実家に戻ることはなく寄せ場での生活となった。60歳頃から建設作業員として日雇い労働をしていたが，3年を過ぎたころに「しんどい」と感じるようになり，「職場に迷惑をかけたらいけない」と思い，自ら救護施設に入所した。入所して畑づくりなど作業活動をして小遣いため，4年したころには33万円貯まったため，自分の意思で退所した。その後，再び寄せ場に戻り清掃業の仕事をしたが，75歳で体力の限界を感じ，自ら相談センターに行き生活保護を受給することになった。今思えば「ばからしいことをやってきた」と思うが，その時々で「今は今の生活が安定しているから，まあおそらくこのままでいいだろうってものがある」と語った。

（6）F氏：80歳代男性。父親と母親，妹と団地で生活していたが，父が酒飲みで満足に食事ができかなった。幼少期は父親の後をくっついて歩き，就学期になっても学校には行かなかった。その後，寄せ場に行けば仕事があると聞き，日雇い労働の生活になった。時間に縛られず，嫌なら仕事を休めばいいし，野宿をすればよいという考えだった。公園にテントを建て，家庭からごみとして出された段ボールやくずを持ってきたり，ごみ箱のふたを開けたりしながら生活用品を整えた。自分は飽きっぽく，長く仕事を続けることができないから，気楽にできる仕事に就いた。しかし，だんだん高齢になるにつれ腰が曲がってきて，仕事を紹介してくれる人もいなくなった。テントは雨漏りし，食事もろくにできない，体調も悪くなった。そんな時に声をかけられ、生活保護を受けることになった。「人は人，自分は自分と自分の意思を貫き通して生きてきたが，野宿は地獄，できるなら抜け出したい。一日でも早く抜け出したいと思っていた」と語った。

（7）G氏：50代男性。職場で営業成績が落ちたことで社長から暴力を受け，暴力から逃れるためにその土地を離れた。お金が尽きたときに野宿生活となった。ホームレスに必要なものは食べ物だと考え，スーパーや土産物店で試食品を食べて凌いだ。将来のことを考える余裕もなく，その日どうして食べようかということばかり考えて生きていた。ろくに食べることもできず，ある時，宗教団体の支援でやっとの思いでパンとお茶を一つずつもらったが，別のホームレスの人に「あなたのパンをください」と言われ，その人も空腹だと思いパンをあげてしまった。食べるものを失い消沈して帰ろうと思った矢先，宗教団体の人が「今日は余ったから」といってパンとお茶を２つずつくれた。それがきっかけで，宗教団体の支援を受け製菓会社に就職し生計をたてなおし，その後支援する立場に変わった。その恩恵を受けた体験を「パンの奇跡」と意味づけていた。

（8）H氏：40代男性。幼い頃から窃盗を繰り返し，そのたびに父親に折檻された。中学卒業後，職に就くが長続きしなかった。17歳で母親が亡くなり，父親が義母を連れてきたことにショックを受け，家に帰らなくなった。覚せい剤を覚え，服役した。出所後，宗教団体が運営している寝泊まりできる場所があることを知り，一時的にそこで寝泊まりをしていたが，窃盗を繰り返し再び服役することになった。この時面会に来た牧師は怒るどころか「出られるから大丈夫」とニコニコして話してくれた。なぜ牧師はこのようなことをしてくれるのか。これまで自分の人生なんてどうなってもいいと思っていたのに，この人は自分の人生に希望を持ってくれたと感じた。こ

の瞬間，今まで冷えきっていた心があたたかくなったのを感じた。聖書に巡り合い，今までに味わったことのない平安を感じ，「俺の人生，大丈夫だ」と思えた。きっかけがなくて自分の力では抜け出せない。自分は愛を受けとることができ、立ち直ることができたと語った。
（9）I氏：60代。金銭問題で事件を起こし服役、出所後は家族に迷惑をかけると思い，野宿生活となった。「老いて死にたい。それまでは生き延びなければ」と思い，アルミ缶などのリサイクルで収入を得た。自暴自棄になっており，過去のことを忘れさろうと酒を飲んで暴れたりした。ある時，公園で病気や高齢のホームレスが寝ているのを見かけ心配になり，その人たちのために薬を買って持っていったり，役所や教会に相談にもいった。配食をもらい，公園に配りに行ったりもした。自分は野宿のままでよく，他者に何かすることが自分の償いになると思った。ある時，支援者である牧師が自分のことを新聞記者に話したため，自分の記事が載った。その後，役所から作業を依頼されたり，宗教団体が施設を拡大する工事の現場監督も依頼された。工事が終わると施設の管理者を依頼され，引き受けた。野宿生活者はみな、元の生活にもどるきっかけを探しており，誰かがつくってくれるのを待っている。自分が施設こられたのは牧師のおかげと語った。

２）野宿生活者がアパート生活に移行することを支援した支援者の体験
(1)自分からアパートに入りたいと依頼された60代の男性を支援した。体調も悪くしたこともあるが，野宿生活での上下関係や夜間の襲撃で嫌な目に遭って弱気になり、アパートに入りたいと思うようになったのではないか。炊き出しでいつも顔を合わせていたし，長年自分が活動をやっていると知っていたから「相談してみよう」と感じたのではないかと思う。
（2）逮捕され，執行猶予付きの判決を受けた男性の支援をした。弁護士から電話がかかってきて，「あなたにアパートを探すことを助けてほしい」と指名していると言われた。いったんアパート生活をはじめるが、近隣とのトラブルになり何度か本人とも話し合いを重ねたが、「もう俺は野宿やるわ」といって野宿に戻った事例があった。
（3）アパート生活に移行するきっかけは、病気や交通事故が多い。例えば骨折などして「アルミ缶とりができない」となると，野宿生活ができないから生活保護につながるケースはある。家族に今の自分の状況を知られたくないなど生活保護を受給したくない理由がそれぞれにあり、病気や事故で野宿生活を継続できないと思った時に気持ちが変わるのではないかと思う。
（4）リーマンショック時は，生活困窮者が増加したことが社会問題となった。その結果，多くの人が生活保護を受給した。こうした社会背景もアパート入居のしやすさに影響している。
（5）たまには冗談をいって楽しくやっていれば，自然と関係ができ相談に来る人がある。物資を支給する中でも関係性は深まる。相談を受けたら早く対応してあげることや，野宿生活者を哀れな対象者ではなく，大きな可能性がある人と思い関わっている。

３）健康支援活動での参加観察
（1）出会った野宿生活者にできるだけ将来の生活をどう思っているか，積極的に問いかけることを試みた。多くの人は将来に対する具体的な希望を持っていなかったが，「年金をもらえるようになったら考える」といったぼんやりとした将来像を持っている人もいることが分かった。一方で、アパートに入りたいという確固とした意思をもっている人に出会い、その場で支援者を紹介し、そのままアパート生活につながった例があった。
（2）相談にのるという立場ではなく，その場をともに楽しむという立場で関わることで，互いを知ることになり関係性が深まっていった。また、マスクを渡しながら声をかけていくと、自然と距離が近づき、その人の生活体験を引き出すことができた。「野垂れ死ぬからいい」と言って

いた人も，定期的に訪れ，近況報告をしていくようになった。
（3）アパート生活への準備として使おうと思っていたお金を失い，失望した気持ちを共感しながら，気持ちが前に向くような関わりをしたこともあった。生活再生に向け，どのような準備をするべきか，野宿生活者の方から報告や相談を受ける関係になっていった。

４）野宿生活者がアパート生活に移行するための効果的支援の一考察
（１）野宿生活者がアパート生活に移行した第一のきっかけには，病気や怪我や老いなどによって野宿生活を継続できないという気持ちになるそれぞれのタイミングがあった。そのタイミングまで野宿生活であるその人の健康を支援し、そのタイミングを待つことも必要である。
（２）第二に，野宿生活から抜け出したいと思っていながらもどうしていいかわからず、支援を待っていたという人もいた。すべての人が支援を必要としている人々であるということを認識し、将来についてどう考えているかを積極的に問いかけ続けることが必要である。
（３）第三に，「パンの奇跡」や聖書との出会いなど，ごくありふれた日常生活の中で起こった転機もあった。野宿生活者が出会う出来事を自身が意味づけし，次の生活に向かう転機となり得るような関わりも必要である。そのためには，野宿生活者を尊重し，窮屈でない安心できる関係性の中で、野宿生活者の語りを聴き続けることが重要であると考える。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計　２　件）
①白井裕子、佐々木裕子（2017）：路上で生きる「いのち」－野宿生活者の「死」に直面した体験から－．ホスピスケアと在宅ケア．25(2)，P.135-140.
②島田友子、白井裕子、吉岡萌、佐々木裕子、井上清美、稲垣絹代（2019）：野宿生活者に関する研究内容の分析と今後の課題－2001 年から 2015 年の国内文献調査から女性野宿生活者に着目して－．名桜大学総合研究所紀要，28，141-148.
〔学会発表〕（計　６　件）
①白井裕子、佐々木裕子、吉岡萌、井上清美、島田友子、稲垣絹代（2016）：野宿生活者がアパート生活者に移行するきっかけ－野宿生活体験者の語りから－. 日本地域看護学会第 19 回学術集会
②吉岡萌、白井裕子、佐々木裕子、井上清美、島田友子、稲垣絹代（2017）：沖縄で野宿生活者から支援者に変化した B 氏の体験－沖縄での野宿生活体験を経て－．日本地域看護学会第 20 回学術集会
③白井裕子、佐々木裕子、吉岡萌、井上清美、島田友子、稲垣絹代（2017）：定住者の在留資格をもつフィリピン人女性の野宿体験－政令指定都市における一週間の野宿体験－．日本地域看護学会第 20 回学術集会
④白井裕子、佐々木裕子、吉岡萌、井上清美、島田友子、稲垣絹代（2018）：野宿生活者がアパート生活に戻るきっかけ 1）－服役経験のある人の語りから－．日本地域看護学会第 21 回学術集会
⑤佐々木裕子、白井裕子、吉岡萌、井上清美、島田友子、稲垣絹代（2018）：野宿生活者がアパート生活に戻るきっかけ 2）－“自宅”で生活する経験のない人の語りから－．日本地域看護学会第２１回学術集会
⑥白井裕子、佐々木裕子、吉岡萌、井上清美、島田友子、稲垣絹代（2019）：野宿生活者がアパート生活に戻るきっかけ－日雇い労働者として生活した高齢者の体験．日本地域看護学会第 22 回学術集会（予定）
〔教育講演〕（計　１　件）
①井上清美（2015）：マイノリティの健康支援活動-野宿生活者への健康相談から－.全国大学保健管理協会近畿地方部会保健師・看護師版研究集会（招待講演）

６．研究組織
(1)研究分担者
佐々木裕子（SASAKI，yuko）愛知医科大学看護学部准教授（研究者番号 10351149）
井上清美（INOUE，kiyomi）姫路獨協大学看護学部教授（研究者番号 20511934）
吉岡萌（YOSHIOKA，moe）名桜大学人間健康科学部看護学科助手（研究者番号 30734727）
稲垣絹代（INAGAKI，kinuyo）名桜大学総合研究所教授（研究者番号 40309646）
島田友子（SHIMADA，tomoko）名桜大学人間健康科学部看護学科教授（研究者番号 80196485）